

韓日文化の相互理解のために

——歴史と将来——

小山宙丸

(1)

韓国思想史学会会長・金三龍教授、主催代表・洪潤植東国大学教授、日本側の大谷大学の雲井昭善名誉教授をはじめとして、韓日の様々な方々のご尽力によりまして、韓日合同の思想史・比較思想学会が、ここソウルの東国大学校で開催できますことを心から喜ぶものであります。関係者の方々に深く、敬意と感謝を申し上げます。日本の敗戦による戦争終了後五十年という節目の年に、隣国である両国が文化と文化交流の歴史と将来について、事態を冷静に見つめて、共同の研究と討議を行い、さらに将来の文化の創造と交流を考察することは、誠に意義深いことと存じます。

さて、一衣帯水の両国の関係交流は、有史以前からあるわけで

すから、たいへん長い歴史を持っているわけでありす。古代においては、韓国の南岸地方と、日本の九州の北岸地方とを包含する一帯に同一の文化圏が成立していることは両国の学者が認めるところです。韓国の方々が巨済島や済州島と自由に往来するようになり、日本人が四国や北海道といつでも行き来するようになり、それらの距離よりはやや広い海峡を、対馬や老岐を経由しながら、かなり自由に交通していました。海の流が速いという自然の障害はあるが、何よりも自由往来を妨げる人為的な障害である国家というものが、まだ存在していなかったのです。文明が進むにしたがつて、人為的な障壁が険しくなつて時によつては人間の往来をはじめ、すべての交渉が困難になり、停滞するというのは、残念ながら歴史の示すところであります。しかし現代はこれらが克服できない障害であるとして指をくわえてみている時代ではないの

です。また歴史に学んで障害を克服することができるときが来ていると思います。

古代においては文物の進歩において、韓国の人々は日本人の人々に比べてはるかに優れており、いわば兄と弟との関係ともいえるような状況ではないかと思えます。倭人は往来によって、あるいは渡来人によって多くのものを学んできました。こういう平和な交流の期間が長い歴史を通じて、大部分を占めていると思えます。しかし近代に近づくにつれて、日本人は時折凶暴な加害者となり、韓国人を塗炭の苦しみに陥れてきました。倭寇、壬辰倭乱、植民地支配などがあります。非人道的な、言い表しがたい苦難を韓国人に与えてきたことについては、我々は深甚の謝罪をし、深刻な反省をしなければなりません。そして更めて歴史を冷静に分析し、将来に期すところがなければならないのです。

(2)

本年の八月一日から三日にかけて、韓国のここソウルで、日韓中シンポジウム「二十一世紀の東北アジア」が朝日新聞、東亜日報、人民日報の共催で開かれ、日韓中三か国にアメリカ、ロシアの専門家を加えた二四人が熱心な討議を展開しました。日本の朝日新聞はその様子を二頁を割いて詳細に報告しています。(八月七日付) それによりますと、東亜日報の権五琦社長は、閉会の挨拶で百年前の一八九五年が朝鮮半島を中心に戦われた日清戦争の

「終結の年であった事実を想起して、「当時、ソウルでこうしたシンポジウムが行われていたならば、二十世紀の東アジアはかなり別の道をたどっていたかもしれない」と語りました。この発言は死児の齢を数えるためではなく、痛恨の歴史の教訓を将来に活かすために、重要な反省であると思えます。このシンポジウムは文化の面でも貴重な示唆を与えているのです。日韓中の三国の中では、中国がはるかに年長の先輩ですが、中国が創造した偉大な文化である漢字、儒教、そして中国を通じ、中国語に翻訳されて韓国、日本に伝わったインドの仏教などによって、やはり日韓中三国は兄弟の国なのです。上に述べましたが、地理的にもお互いに隣接しているし、兄弟のような関係だから、愛も憎しみもいっそう烈しいのだと思えます。これからはお互いに一人前の大人としての、紳士淑女としての兄弟姉妹関係を作り出してゆく時期であると思うのです。

(3)

三国はそれぞれに土着的な思想、宗教は持っています。その上に世界的な文化財としての漢字、儒教、仏教を受容し、それぞれに骨肉化したのであります。しかし骨肉化したとしても、この流儀は三国がそれぞれのやり方で行ったのであって、長い経過のうちには様々な問題があり、それらの三つのものが三国において、どういう状況になっているかといえます。まったく異なったあり

方になっていきます。三国のうちではその三者に対して、あるいはその三者のいずれかに対して、もうすでにその影響力が存在してないとか、マイナス評価になっている場合があると思います。しかしそういうことを含めて、これら三つのものが三国を結び付ける精神的紐帯になっていることは否定できないのです。お互いの国をたずねて、外国にきたような感じがないとか、祖先の国のようだとは、時に味わう感情であると思うのです。最近の東アジアの文化圏の経済的興隆に対して、儒教圏の問題であるとする研究がむしろ欧米人の側でなされていることは、その成果はまだ不十分であるとしても、周知のことです。いずれにしても互惠、平等、自由の新しい理念で東アジア文化圏が遠からず生まれることは必至の状況であると思いますが、そのさいこの三国が一つの

基幹的役割を果たすことになるでしょうが、また果たさなければその文化圏は成立しません。しかし現在のところ三国の文化交流、知識交流は成功していないし、まったく不十分の状態です。さきのシンポジウムの発言をまた借りれば、一八四〇—四二年の「阿片戦争前は、日本は中国文化を学んでおり、日本人で英国の勝利を予想する人は少なかつた。だが結果はよく知られている通り」(艾農氏)になり、現在の香港もその結果生まれたものです。

これについて二つの問題が指摘できると思います。一つはアジア的停滞といわれるものであり、一つは西欧の植民地化政策です。この二つのものが、その後の一世紀にわたる東アジアを混乱の極

に導きました。日本もまた約三〇〇年に近い鎖国の眠りを眠っていましたが、阿片戦争その他の衝撃によって国内に無血革命が起こり、一転して新政府は開国政策をとり、いわゆる脱亜入欧へと強力に展開して行ってしまいました。その結果植民地の鉄の鎖を解き放つという考えを掲げながら、低劣に植民政策の片棒を担ぐことになり、東アジアの諸国に言い知れぬ迷惑をかけることになってしまったのは、さきに述べたとおりであります。

しかしそれ以来一世紀半を経た今日、西欧の植民地政策はほとんど影を消し、アジア的停滞も姿を消し、アジアは大車輪で発展への道を歩き始めているといつてよいのではないのでしょうか。今は東アジア文化圏の共通の利害を共に探りながら、共生、相生をモットーとして進むべき時であると思います。

(4)

欧米の文明は植民地政策でも分かるように、大変攻撃的な文明であります。けれども同時にその文明が自然科学や科学技術に代表されるように、近代世界において非常に大きな力を持ったことは否定できません。それは世界の多くの部分に文明の普及と恩恵をもたらしました。しかし現在では同時にかなり以前から欧米文明の重大な危機がいわれるようになって、ことも多数の人の認めるどころです。ここでもアジア文明の出番があります。力はあるが攻撃性の文明では収まりのつかない問題が生まれ、行き詰ま

りが生じているのです。最近アメリカの学者が『文明の衝突』という本を書きましたが、アジアの我々は多くの経験によって「文明の調和」のモデルを示せるのです。これからは経験によって得た調和の型に根拠を与えて、理論付けをし、それを世界の人々に示していかなければなりません。私のささやかな体験からの話して恐縮ですが、私はスリランカの学者のお世話をしたことがあります。彼は日本の歌舞伎の研究者でした。なぜスリランカの学者が日本の歌舞伎をと意外でしたが、彼の言うところによると、スリランカが西洋文明の波をかぶったとき、古い芸能が根こそぎ失われてしまったのだそうです。それで日本に古いものがたくさん残っているのが、誠に羨ましいのだそうです。そういわれてみますと、日本には古来からの舞楽、雅楽、猿楽、田楽、能などから、素人ですから挙げかたはアト・ランダムですが、近代劇、現代劇に至るまで、これらは欧米の影響を受けたものですが、みな存在しています。それぞれものが皆棲み分けて活動し、重層的に生きています。そして今は芸能に例をとりましたが、他の領域についてもいえます。宗教、思想、文学、芸術などいろいろな領域についていえるのであります。

(5)

ベルリンの壁崩壊に象徴されるような、冷戦構造の終結に伴う世界史の新しい局面は、韓国と日本の様々な問題を見直す、一つ

の得難い機会であり、ありがたいことに本学会もそういう時期に行われているわけであります。さきにあげた厳しい時代をもう一度冷静に見据え、同時に江戸通信使に代表されるような両国の良好な関係の時代についても再認識すべきです。また古代において韓国文化や渡来人の日本文化への計り知れないほどの影響についても、ある場合には両国の学者が共同してであるが、研究が目覚ましい進展をしています。できる限り早くその時代の定本的な歴史叙述ができるようになることを強く望むものであります。そしてその時代だけでなく両国の関係の全体の通史についても、共通に読むことのできるような叙述ができることを同様に要望するものです。そしてさらにこれらの課題は共通教科書の問題に進むべきものであります。また、韓国を代表する李退溪についてのように、個人を対象とするような大きな国際学会が何度も行われていることも注目すべきでしょう。

韓国と日本が新しい時代にあつては、協力して共同作業に従事するならば、東アジアにより進んだ文化が生まれることになります。それによってアジアの文化に貢献し、ひいては世界に貢献していくべきでしょう。これからのモットーは入巫入世であります。それには民間レヴェルの交流が不可欠ですが、そういう対話の機会を与えていただいた韓国思想史学会、東国大学校をはじめとして関係の皆様のご好意、ご協力で改めて心からの感謝とお礼を申し上げて、私の講演を締めくくらせていただきたいと思います。

(参考)

一つの参考資料として、早稲田大学の日本敗戦後の韓国との交流の状況について述べます。一九九四年三月二十五日米日中の韓国の金泳三大統領夫妻は、早稲田大学大隈講堂にお出でになり、親しく学生達に講演してください、韓日両国の友好と将来について述べられました。早稲田大学は金大統領に名誉法学博士の学位を贈って、大統領の業績と栄誉を称えました。金大統領は一九八五年野党の指導者の時代にも早稲田大学をお訪ねいただいています。その時「大道無門」という大字を揮毫して残されました。それを今回お見せすると大変お喜びになり、これは貴大の門の無い大学として知られていたからであります。

早稲田大学は他に崔斗善（故人・国務総理）、金相浹（故人・高麗大
学校校長、国務総理）、金相万（故人・高麗大学校校長、東亜日報社長）
の三氏にも名誉博士の学位を贈っています。崔斗善氏と金相万氏は早稲
田大学の卒業生であり、高麗大学校は一九七三年以来密接な提携関係に
あります。これらの方は皆、あるいは母校の名をあげ、あるいは両校の
ひいては両国の交流に尽くされた方々であります。

高麗大学校との交流は、教員、学生の交換が活発に行われていますが、
さらに一九八五年からは韓国外国語大学校と、一九九四年からは漢陽大
学校、成均館大学校との交流協定が成立しています。

一九九五年度、早稲田大学の外国人留学生数は、四五か国から一一〇
三名です。そのうち韓国からの留学生は四二二名（内女子一一八名）で
あり、国別では一番多いのです。二番目は中国で三五五名（女子一三八
名）であります。アジアからの留学生は全体の留学生の八五パーセント
を占めています。

(こやま・ちゅうまる、中世哲学・宗教哲学、

日本比較思想学会会長・早稲田大学教授)